

宗旦の茶考

村井節子

(第四回生)

(序)

「学道は、先ず須らく貧を学すべし、名を捨て、利を捨て、一切諂ふなく万事なげすつれば、必らず良き道人とはなる也。」

道元禪師は、このように説いている。

禅とは、一切の物質的なものの束縛から脱して、精神的自由を得ることである。平凡な生活の中に、身をゆだねながらも、心は、一点にとどまらず、他の考えに影響されず、すべてをうちこんで、当面のことにぶつかっていくことである。弱さの中に強さを持ち、物質的乏しさの中に精神的豊かさをもつ、不足の中に満足を覚え、論理性よりも暗示的、象徴性を重視するものである。そして、行住坐臥の中で、自己をみつめることである。(ここにおける自己とは、物の分別、好き嫌い、良し悪し、損得などを決めたりするものではなく、自然の中における個、ひいては、普遍的な自然なるものを指す。)

茶湯の中に、禅の精神が入り、その精神が茶湯の価値的存在・主体をなすものが、佗び茶である。したがって、佗び茶とは、静閑な中に精神を、集中し、無我の世界に入ることである。佗び茶の美意識とは、集中する精神における美・外観にとらわれず内面の充実した美・冬の野原において土の中に生命をひそめた小さな花にいた美

・不完全な美を尊び、絢爛豪華なる美しさを否定するものである。そして、この佗び茶こそ、私は、本来の茶の姿であると思う。

佗び茶は、珠光にはじまり、紹鷗・利休により、完成したとよくいわれる。村田珠光は、能阿弥について、書院の茶を学び、一休禪師に参禅し、従来の喫茶法式をまとめ、禅宗の考え方を、これに加えて、彼なりの茶湯を形づくった。武野紹鷗は、珠光のあとをついで、一般的指導理念としての佗びの精神をきずいた。紹鷗の弟子、千利休は、紹鷗の佗びの精神をうけつぎ、時の主導者、豊臣秀吉と結びつき、茶湯を彼なりに完成して、広めた。しかし、珠光の佗び茶は、書院造りの豪華さを多分に残し、紹鷗・利休は、佗びの精神は貫ぬいてはいたものの、実生活においては、かなり裕福な生活をしており、彼らの茶湯における佗びの精神と矛盾していたと思われる。

これらのことから、佗び茶を本来の意味から完成したのは、利休ではなく、利休の茶を正しく継承し、実生活においても仕官せず佗びた生活をし、名物などを気にせず、自分の思った茶を行った利休の孫、宗旦ではないかと思う。

前述したように、私は、佗び茶というものが茶湯の本来あるべき姿であると思うので、その佗び茶というものを、宗旦の茶をみながら考えていきたいと思う。

また、宗旦と同時代に、茶のもう一つの大きな流れとして、將軍の茶堂であった古田織部・小堀遠州・片桐石州らを中心とした、大名茶というものがでてくる。徳川時代、封建体制も安定し、平和な日々が続く中で、茶湯も、明るく、豪放的な、武士らしいものが求められ、それに順応し、禅にかわり、王朝趣味をとり入れ、本来、

無差別平等を唱えた茶湯の本質を、支配者のための茶湯にしたのが大名茶である。封建体制の確立・徹底化により、武士の間に大名茶は、大いに流行したのである。宗旦の茶は、それに対して市井の茶といわれている。

大名茶と宗旦の佗び茶、これらについても考えてみたいと思う。

第一章 佗び茶の源流

第一節 村田珠光

鎌倉時代初頭、薬用として用いられた茶に新しい優良な茶種と、宋朝の禅茶法式を、とり入れたのは、明庵栄西であった。彼ののち喫茶は広範囲にひろがったが、禅宗的なものは、茶礼として姿をとどめたにすぎず、茶寄せ、闘茶など、世俗的なものになっていった。東山文化期になると、茶の栽培が盛んになり、喫茶は上流階級のものばかりではなく、庶民の間にも広がる傾向があった。その中において、村田珠光は当世流の書院の茶を、庶民化し、その茶に禅宗的考え方をとり入れようとしたのである。珠光は大徳寺の真珠庵に入り、一休禅師に参禅し、また台子飾りの法式を定めた能阿弥に茶花を学んだ。ここにおいて、禅茶、すなわち、佗び茶がはじまる。

彼は喫茶の場を、広間から、小座敷や、四畳半の茶室を設けて独立させたり、床の間の掛け物の幅数を減少したり、いままでの茶法式を簡素化していった。

「此道、第一わろき事ハ心のがまむ、がしゅう也。こふ者をはそねミ、初心の者をハ、見くたす事一段無勿躰事共也、こふし々にハ

ちかつきて一言をもなけき、又初心の物をはいかにもそたつへき事也、此道の一大事ハ和漢のさかひをまきらかす事、肝要ノようしんあるへき事也、又当時、ひそかると申て、初心の人躰か、ひせん物しからき物などをもちて、人もゆるさぬたけくらむ事、言語道断也、かるると云事ハ、よき道具をもち、其あちわひをよくしりて心の下地によりてたけくらみて後までひへやせてこそ面白くあるへき也、又さはあれ共一向かなはぬ人躰は、道具にハからかふべからず候也、いか様のとてり風情にてもなげく所肝要にて候、たたかまん、そしゅうかわろき事にて候、又々かまんなくてもかなはぬ道也、諸道にいわく、心の師とはなれ、心を師とせざれと古人もいわれし也。」(珠光茶道秘伝書(注1)より)

これは、珠光が弟子の古市播磨法師にあてた文書の中にかかれているもので、芸において一番悪いことは、自己の意識・おごりたかぶり・自己の損得を考えたりすることであるといひ、無の境地をすすめている。また、当時は、たぶん唐風化していたのであるが、それに対して珠光は、「和漢のさかひをまきらかすように」、すなわち、和様と、唐風を統合しなくてはいけないと説いている。そして、ひそかるといって、初心の者が、佗びた焼きものを使い、知ったような顔をするのは、言語道断であるとし、この境地は名物のころをよく知った上で、いたれるものであるとのべている。これらの精神が、彼の茶に貫ぬかれているものと思われる。

また、山上宗二記に、「珠光ノ云レシハ、藁屋ニ名馬繫タルカヨシト也、然則、粗相ナル座敷ニ名物置タルカ好シ、風体猶以テ面白也。」とあり、これは、珠光が外は貧しいが、内は充実しているところの不完全なる美というものを好んでいることを示している。

珠光が四疊半をたてたことは、前述したが、彼は、その四疊半をもって眞の座敷にした。珠光好みの四疊半は、奈良の称名寺に現存する珠光庵にみられる。珠光庵は、一名、独炉庵といい、床があり、違ひ棚を設けて、中央に炉を切り、天井その他に、数寄をこらしている。四疊半のうち、一疊半を、壁代と半間の障子でしきり、三疊の方に貴客を、一疊半に供の者を躡口から入らせ、貴人と供人を区別した。また、山上宗二記に「昔も珠光は北向、右勝手」とあり、珠光の茶席は北向であり、右勝手であったことがわかる。

無の境地や、不完全なるものの美の追求、法式の省略・簡素化など、珠光の茶は、佗び茶をもとめていたのにかかわらず、南方録にかかっているように、四疊半の飾り付けを、書院におけるのと同じようなものにした^(注2)り、書院の茶のなごりをとどめていた。

珠光の提唱した佗び茶をうけつぎ、深めていったのが、次にのべる武野紹鷗である。

第二節 武野紹鷗

戦国時代がはじまり、全国的に動乱がおきている中で、京都・奈良を消費地として発展した港町・堺は、回りの大名たちを、互いに牽制させ、中立かつ平和的存在であった。堺の町衆らは、十人衆・三十六人衆という代表者の合議機関を設け、司法権・行政権を握り、しだいに自治都市的な形にしたので、堺はますます力をつけ、他のものの武力侵入を防いだ。したがって、戦禍のをがれようとする公卿や僧侶などの文化人が、京都などから堺に入り、それにつれて、京の文化の、堺流入ということがおこった。京では、珠光の茶が流行しており、名物、とりわけ唐物が、珍重されたが、堺におい

ても、珠光の茶がはやったのである。そして、商売の関係から唐物が手に入り易い堺において、ますます茶湯がさかんになり、京都にたちうちできるようになった。

堺の船松町の皮屋であった武野紹鷗も、珠光の弟子宗陳・宗悟に茶を学び、南宗庵の大林宗套に参禅し、珠光の佗び茶をうけついでだ。

紹鷗の茶湯の考え方をしめすに、「結構にせんとすればよはくなり、佗びしくせんとすればきたなくなる、その故に、寂びたる様にするのがよい。」と、弟子にのべた言葉がある。わびしいということとは、物の不足している状態をしめす。このことは、うすぎたないという觀念をよびおこす、そこで、佗びの理念だけを残し、実質面でのきたなさをとり除き、新たに「寂び々」という理念をつくりだしているのである。また、紹鷗は、簡素な清浄さを重視した伊勢神宮の建築の精神を思い、慎しみ深く、おごらぬ様を、佗びと考え、一般の人がもつべき理想の理念であるとした。

茶室における紹鷗好みは、山上宗二記に、「右ハ紹鷗座敷ノ指図也。但、北向、坪之内又ハ見越ニ松大小多シ。天井ノ子板、柱檜、真ノハリ付、クロフチ也、勝手、フスマ、障子、横引手、書院二間トモニ四疊半也。」と、記しているように、正方形の四疊半で、北向左勝手である。また、一側には、深さ二尺三寸の間床を付け、他側には、葦棚をつけ、一疊半の勝手をへだてて四疊半の書院と接し、ほかの二側は、坪の内に接し、おもな方には簀子縁がついていて、ここから出入りした。中は、中央の半畳に炉がきられ、天井は杉の一枚板張で、柱は檜、床框は栗の木の掻合わせ、壁は眞の張付である。そして、独自の茶室ではなく、書院とははつきりはなれ

ていない囲い風の茶席である。

また、紹鷗の四畳半の草の座敷における台子の使い方について、南方録に、「鷗は、此座に台子はかざられず。及台をかざられたる時は、かけ物、置物、珠光同前。袋棚の時は、床に墨蹟、花入の外は不被置。」とあり、紹鷗は珠光同様、四畳半草の座敷には、台子を用いず、及台子を用い掛け物をかけたが、紹鷗が考案した草の道具である袋棚を用いるときは、墨蹟と花入だけを飾ったものと思われる。

紹鷗は珠光の佗び茶をうけつぎ、彼なりの茶湯というものをつくったが、茶湯というものを一つの道と考え、茶道を大成したのは、紹鷗の弟子千利休であった。

第三節 利休

姓は田中。父与兵衛の時、泉州堺に移住し、魚問屋となり、納屋衆に列し、祖父千阿弥の千の字をとって、千氏と称したといわれる。利休は、与兵衛の長男として、大永二年に生まれ、与四郎と称した。彼の少年期の堺は、京都からの文化流入で、文化的にも栄え、茶においては、紹鷗などの名茶人がでて、京都をしのぐ程になった。このように、茶湯が流行した堺において育つたため、利休が茶を習ったのは、当然のことと思う。与四郎は天文九年、宗易と改名する。南方録に「宗易ノ物語ニ、珠光ノ弟子、宗陳・宗悟ト云人アリ、紹鷗ハ此二人ニ茶湯稽古修行アリシ也、宗易ノ師匠ハ紹鷗一人ニテハナシ、能阿弥ノ小姓ニ右京ト云シモノ、壮年ノ時、能阿弥茶ノ指南ヲ得タリシガ、後ハ世ヲ捨テ人ニナリテ堺ニ居住シ、空海ト申ケルニ同所ニ道陳トテ隠者アリ、常々心安クカタリテ、茶道ヲ

委グ道陳ニ伝授アリシト也、又、道陳ト紹鷗、別シテ間ヨカリケレバ、互ニ茶ノ吟味ドモアリシ也。」とあり、宗易は珠光から、宗陳・宗悟・紹鷗に伝わってきた佗び茶を、紹鷗に能阿弥から、空海・道陳に伝わった書院の茶を、北向道陳に学んだものと思われる。

天文十三年二月二十七日付、松屋久政茶会記に、大富善幸が所持していたという「善幸香炉」を、四方盆にのせて床にかざり、珠光の茶碗を使用しているとかかれており、また、宗達他会記にも、宗易が珠光の茶碗をつかっているとかかいている。珠光の茶碗とは、ここでは、素朴でわびた下手物風の珠光の青磁の茶碗をさす。これらのことから、宗易は若い頃、珠光への回帰をめざし、素朴で佗びた茶を行なっているものと思われる。

天正元年頃、宗易は当時有力であった織田信長に仕え、同じく信長の茶堂であった今井宗久・津田宗及らとともに、優遇されている。このころは、名物が政治上においても、大きな位置をしめ、忠誠を誓うときのあかしとして名物を進上したりした。よって、信長のところに、自然と名物があつまり、また、信長も権力の象徴として名物狩りをした。そして、名物見せという目的で、茶会がしばしば催された。その中で宗易は、紹鷗以来の佗び茶と、信長の好んだ道具茶を併行した。信長はまた、名物茶道具の領賜をもって、論功行賞とし、家臣らに勝手に茶湯をすることを禁じ、許可制にした。秀吉も、天正四年七月、安土城落成時の作事奉行としての功績をもって、牧溪筆の大軸の月の絵を信長からもらった。この時から、秀吉は茶湯をすることを許されたのである。秀吉は、信長の茶堂である宗及に茶を学び、茶湯に熱中していたので、宗易ともそのころから、自然と交流があったものと思われる。

天正十年、本能寺の変で織田信長が殺され、山崎合戦などのち、豊臣秀吉が政權を握った。秀吉は、翌年閏正月、信長の茶堂であつた今井宗久・津田宗及・千宗易の三人と、重宗甫・山上宗二・万代屋宗安らの堺出身の茶人を招き、信長所持の松花の大壺をかざり、打雲大海・乙御前の釜・井戸茶碗を使って茶会を催し、茶湯において、信長の後継者であることをしめした。秀吉も信長同様、道具茶をし、名物狩りをした。

秀吉の勢力が増すにつれて、秀吉の内の宗易の地位も高くなり、力を増した。天正十二年秀吉は、関白となり、翌十三年秋、禁裏に参内して小御所で茶会を催し、正親町天皇らに献茶をした。その時、宗易は利休居士号を与えられ、秀吉の茶の後見をした。宇野主水の「頭如上人貝塚御所日記」の天正十三年十月七日の条に、

京都ニハ秀吉公申沙汰ニテ、禁中ニテ茶湯アリ。其例無シト雖モ、当時、秀吉此道御執心ノ故也。宗易ヲ利休居士ニナサレ、禁中ニテ御茶タツル也。御前ノ御茶ハ秀吉公タテラル、御自分ハ御呑ナシ。御手長晴季公・天子様・御方御所・若宮御方・伏見殿・龍山近衛所・秀吉 以上御六人。

とある。このことは、秀吉が、利休の力を、宗及・宗久よりも認めたとことをしめす。のち、利休は、天下一の茶人といわれた。

秀吉には、二つの好みがある。一つは、自分の教養のなさを隠すための豪華なものを好むことで、もう一つは、利休が導いたところの、秀吉のかつての貧しい生活の郷愁をさそう佻びたものを好むことである。その二つの好みを適確に表わしているのが、黄金の茶室と、妙喜庵の待庵である。

黄金の茶室は、「平三疊也、柱ハ金ヲ延テ包み、敷(居)モ鴨居モ

同前也、壁ハ金ヲ長サ六尺ホド、広サ五寸ホドツ、ニ延テ、雁木ニシトミ候。縁ノ口ニ四枚ノ腰障子ニシテ、骨ト腰ノ板ハ金ニシテ、赤キ紋紗ニテハリテ、畳表ハ狸々皮、ヘリニハ金襴小紋、中ロミニハ越前綿、三尺ノエン、是ハ竹ツヅラニテカキ候、同カマチ皮ムキノ木也」と、宗湛日記にかかれてるように、すべて金でつくられ、秀吉の豪華好みとともに、その権力の大きさをしめしている。妙喜庵の待庵は、利休の好んだ茶室で、二疊敷・隅炉・室床という構造で「わびを具象化したような茶室である。」と、芳賀幸四郎氏がのべている様に、利休の佻びの表現であつたと思われる。

利休は、秀吉の茶堂としての立場上、黄金趣味にも応じたが、彼は、戦国の世の苦しみになれた精神を継承するものとして、平和にのぞんだ世が、すぐに奢侈におちいることはよくないとし、昔の人々が苦しみに対してよく身を修めた精神を忘れないために、佻び茶をして修身の場と考え、秀吉にも、わび茶を指導した。天正十五年十月一日、秀吉は北野大茶会(注)を催した。この茶会の性格について芳賀氏は、「北野松原という豪放な舞台のなかで、畳二疊という小座敷が考えられ、御名物共のこらず揃えて見せしむるという一方に、

釜一、つるべ一、呑物一、茶なきものはこがしにても苦しからすという主張がのべられている。そこには秀吉的なものと利休的なものとがたくみに共存している」という、林屋・村井両氏の説を引用して、「この大茶会はたしかに、山里の茶室のわびに心ひかれながらも黄金の茶室の豪華さへの傾斜が優越している秀吉的な茶と、それとまさに逆の構造をもつ利休的な茶とが危い一線において、均衡をたもっていた茶会である。」とのべている。この意見について、私も同意する。そして、その二つの異つた好みの矛盾が爆発し、それ

が、天正十九年の利休の自刃という形となってあらわれたのであると思う。

利休は、秀吉の権力の下で、いろいろなものを好んだ。利休のすぐれた鑑識力により、利休好みのものは、今日まで伝えられている。

利休好みの茶席としては、四畳半・三畳・二畳・一畳半などの諸座敷があげられる。四畳半座敷については、紹陽が、珠光の眞の座敷を、行の座敷にして簡素化したのが残っていたため、利休はそれを、数寄屋建築として、草の座敷を完成した。天井はこも天井、床は幅四尺三寸、深さ二尺四寸、柱は丸い柱で、壁をはり附から、ぬりかべにし、下地窓を加え、にじり口をつけて、茶室を独立させた。この四畳半は、宗旦の又隠の席にうけつがれたと思われる。三畳敷については利休以前にもつくられている。三畳敷は、長方形をし、長い側に床をつけると平三畳、短い側につけると深三畳といい、利休は、深三畳を好んだと思われる。二畳敷については、前述した待庵があげられる。これについて、山上宗二記に、

二畳敷ノ座、是は貴人數、又、一物モ無佗數寄敷、此外ハ無用とあり、この茶席の特殊性がわかる。二畳敷を、利休はさらに縮めて、一畳半をつくったといわれるが、これは、実際は一畳台目であったと思われる。

このように、茶席において、利休は従来のものをより簡単化し、佗び味を深め、炉の寸法を、一尺六寸四分から一尺四寸四分にし、床を一間床、幅五尺五寸、五尺などという大床から、四尺三寸床にした。また、板床・洞床・壁床などを好み、連子窓・突物窓・下地

窓・風炉先窓・罫口・通口・釣棚などを発案したといわれる。露地についても、以前は、数本の樹木を植えるといったものであったが利休は、そこに、手水鉢などいろいろな工夫をほどこした。掛物については、墨蹟を、第一とした。花入は、竹筒とかごを重んじた。茶釜においては、京釜の第一人者といわれた辻與次郎が、利休の切形によって鑄たものが多く、蒲団釜・尻張釜・雲竜釜などがあげられる。利休好みの水指は、唐物では、不識、和物では釣瓶、薬籠、塗物では黒片口、木地の類では曲釣瓶などがあげられる。利休形の茶入としては、唐物では丸壺・木葉猿・尻張、塗物では真中次・黒棗・尻張・平・白粉解・一服入・黒塗茶桶・挽溜・黒塗雪吹・黒塗面中次・薬器などがあげられる。茶碗は、薬長次郎に焼かせ、今焼抹茶茶碗としてもはやされた。利休はその佗び味を楽しんだものと思われる。また、茶約においては、折撓茶約を作った。これは、かいさきを無造作に曲げたものである。

以上のように、利休は独自の創造をなしとげ、いろいろなものが、今日まで、利休形として伝えられている。また、利休は、佗び茶を完成したといわれているが、彼の佗び茶は、一物もたないという佗び茶ではなく、秀吉の援助、堺の商人としての金力、すぐれた鑑識眼により、彼の所持の名物と、わびた道具をとりあわせ、そのとりあわせに作為をこらすといったものであった。これは、利休が、権力の下にいるため、その道具茶をも、併合しなくてはならなかったからであると思う。

利休死後、秀吉は、利休の茶に武家らしさを加えることを、利休の弟子古田織部に、要求したといわれる。また、封建体制がしかれ、世の中が平和になると、世襲などで、身分が固定されてしま

う。大名が、ふりかえる過去をもたなくなり、大名らしい豪華なものを好むようになる。茶湯においても、佻びたものより、豪放なものを好むようになる。このような風潮に応じたのが、利休や紹鷗のような商人ではなく、自ら大名であった古田織部である。そして織部がはじめた茶を、大名茶という。次章では、この大名茶の流れを、その中心人物の茶をみることよって、のべてみたい。

〔注1〕 珠光茶道秘伝書は、珠光が弟子、古市播磨に授けた茶道秘伝書で二幅あり、二幅とも鴻池道徳が入手して同家に伝えた。

一幅は、「此道、第一：」とかかれており、宛書きは、古市播磨法師となっている。珠光所持と伝える竹の台子とともに現在は、平瀬家の所蔵である。一幅は、「お尋の事」と題して五ヶ条よりなり、茶花・茶香道具・主客のことにおよんでいる。宛書きは古市播磨守となっている。前書よりは古いものと思われる。(茶道辞典より)

〔注2〕 「南方録」にて

一間床には、秘蔵の團悟の墨跡をかけ、台子をかざり給ふ、其後、炬を切て弓台を置合せられし也：床にも二幅対のかけ絵、勿論、一幅の絵かけられし也、前には卓に香炉・花入あるひは、小花瓶に一色立華、あるひは料紙・硯箱・短尺箱・文台、或は、盆山、葉茶壺など、これらは専らかざられし也。

〔注3〕 「北野大茶湯之記」に、北野大茶会の高札がかかれています。これからこの茶会の性格というものがわかると思う。

一、北野の森に於て、十月朔日より、十日の間、天気次第、

大茶湯成さるる御沙汰に付きて、御名物ども残らず相揃られ、数奇、執心の者に見させらるべき御為、御催し成され候事。

一、茶湯執心においては、また若党・町人・百姓以下によらず、釜一つ、釣瓶一つ、呑物一つ、茶なきものは、こがしにても苦しからず候間提げ来り仕るべく候事。

一、座鋪の儀は、松原にて候間疊二疊。但し佻者は綴付にても稻掃にても苦しかる間敷事、着所の儀は次第不同たるべし。

一、日本の儀は申すに及ばず、数奇の心懸これ有るものは唐国の者までも罷り出づく候事。

一、遠国の者まで見せらるべき為、十月朔日まで日限御延べ成され候事。

一、斯くの如く、仰せ出ださるるは、佻者を不便に思召すの儀に候所に、今度罷り出でざる者は、向後においてこがしをもたて候事無用との御意見の事候。罷り出でざる者の所え参り候者も、同前たるべき事。

一、佻者においては、誰々遠国の者によらず、御手前にて御茶下さるべき旨、仰せ出だされ候事。

しかし、北野大茶会は第一日目でやめることになった。

第二章 大名茶の形成

第一節 古田織部

天文十三年、桑田重定の子として生まれた織部は、伯父古田可兵

重安の養子となった。通称左介、初名を景安といい、のち、重然と改めた。はじめ細川三斎のもとにあったが、信長に召し出されて、活躍、本能寺の変後、山崎の合戦などの功績により、天正十三年、従五位、下織部正に叙任し、山城国西岡三万五千石の大名に列した。利休について茶を学び、獨創性にすぐれていた。利休自刃後、秀吉のお伽衆にとりたてられ、また、秀吉の望むままに、利休の茶に武家らしさを加え、書院における茶法を制定し、天下一の茶人といわれた。江戸時代に入り、二代將軍秀忠の茶の師範となった。身分制度の固まりつつある時代の流れにあつて、支配者階級付きの茶人として、ますます職業的なものにならざるをえなかつた。よつて、利休の佗び茶を、基礎としていたにもかかわらず、彼の茶は、獨創的作爲に満ちたものであつた。

このように、世の流れに順応した茶を行なつていたにもかかわらず、織部は、誤解をうけて師利休と同様、元和元年六月十一日、自刃した。

織部の茶は、前述したように、利休の佗び茶を基本として、それが、それに、彼独自の豪放さ、陽気な明るさを加え、利休を超越しようとして試みている。茶事譚に、

針屋宗春老常ニ物語せしは、織部が点法は立派にて、今も目に付様にて難忘。又利休が手前は少しも目に立事がなく、点るの始より仕舞ニ至るまで不致見留、誠ニ凡慮の外群を離れしと申されし事、貞翁も御聞伝にてをり、御物語有し也

とかかれてるように、利休の自然なるがままの点前に比べて、織部は、作爲的に、人工的点前をしているように思われる。また、利休好みの長次郎の茶碗と、織部好みの茶碗をくらべてみると、長次

郎の茶碗が、均衡のとれた形をしており、おだやかな感じを与え、色合は、黒か朱の一色でまとめ、内向的なものであるのに対して、織部の茶碗は、形は不均衡で、ゆがみがあり、大胆な図柄をし、色も様々な釉薬を使つており、明るく外向的である。織部はまた、要所に銅の青釉をかけ大胆な構成の織部焼きをつくり今日に至つてゐる。織部好みについて、「織部焼の研究家で、その窯跡を発掘研究してゐる加藤唐九郎氏の話によると、織部好みの陶器をやいた窯跡を發掘するとき、その当時の事情が色々思ひ浮ばれるが、結局織部焼の好みは、意気なネエさん」の趣味だと思はれたとの事である。この話を私は興味あるものにきいた。この玄端の喫茶活法の別伝序文にも、古田織部は、遊女を茶席にひき入れて給仕をさしたと記して居る様に、その好みになるものに、さうした趣味が現れてゐたとしても不思議ではない。」と西堀二三氏は「宗旦研究」の中で、述べてゐる。実に織部好みは「イキ」という感じである。

織部は、茶器においては、杏形茶碗・餓鬼腹茶入・織部形伊賀水指などを好み、茶室においては、三疊台目の独特な数寄屋を好んでゐる。

桃山末期から、江戸初期にかけての文化は、古典趣味・王朝趣味が復興し、また、その大和風情緒の中に、南蛮文化が一部混ざつてゐた。それらの風潮は、織部の茶にも見られる。織部が花木を嫌う露地の植込みにタンポポの花をあしらい、山鳩を鳴かせ、琴の音をひびかせたといういつたえや、白蓮やけいとうの花など色彩のゆたかな花をいけることから、古典趣味や大和絵趣味の傾向が見られる。織部の茶碗・角皿などの模様からは、南蛮文化の影響がみられる。

織部は、茶の主導権を、利休などの町人の手から、大名の手に移し、大名らしい豪放な明るい茶をつくりあげていったが、封建体制の支配者に加担し、その大名茶を、支配するための茶にし、規律化・様式化したのが、小堀遠州・片桐石州であった。

第二節 小堀遠州

遠州は、師古田織部が、槍一筋の武功を、重ねて成り上がったのに比べて、父新介正次の時から普請奉行であり、慶長九年、二十六才で、備中国松山一万二千四百六十石余を、ゆずりうけ、のち、作事奉行・伏見奉行をつとめた。このような穩やかで、まじめな生活をした遠州は、織部のような武士らしい、豪放さ、鋭さがない代わりに、形容の整った美しい気品の高いものがあるので、織部からもその才能をみとめられていた。織部死後、三代將軍家光の茶道師範となった。

彼の好みについて「きれいさび」とよくいわれる。露地の風趣のどうあるべきかを尋ねられたとき、連歌師柴屋軒宗長の発句「夕月夜海少しある木の間かな」をもって答えたといわれる。適度な簡素化と洗練された構成美、これが遠州の美意識であるが、利休の佻びの緊張した厳しさというものがない。そこには、王朝趣味の穩やかな明るさの高まりがうかがわれる。織部における古典趣味が、遠州にいたって、もりあがりを見せたのである。

「小堀遠州書捨て文」の中で、

それ茶の湯として外にはなく、君父に忠孝を尽し家々の業を懈怠なく、ことさらに旧友の交をうしなふことなかれ。春は霞、夏は青葉がくれの郭公鳥、秋はいと淋しさまざる夕の空、冬は雪の暁、

いづれも茶の湯の風情ぞかし。道具とてもさしてめづらしさによるべからず、名物あたらしとてもかはりたる事なし、古きとても其の昔は新しく唯家に久しく伝へたる道具こそ名物なれ、古きとて形いやしきを用ひず、新しきとて姿よろしきは捨つべからず、数多きを羨やまず、少きをいとはず、一色の道具なりとも、幾度ももてはやして末々子孫までも伝ふる道もあるべし。一飯をすゝむとても、志厚きをよしとす、多味なりとも主たる者の志薄きときは、早瀬の鮎、水底の鯉とても味もあるべからず。籬の露、山路の蒿かずら、明くれこぬ人をまつ葉かぜの釜の音たゆることなかれ。

壁書

条々

小堀遠州

とあり、遠州の茶道観というものがわかる。遠州は、君に忠、親に孝、という封建体制の根本的考えの上に、茶道はあるとし、茶道をもって、自身の修養の場とした。茶湯のおもむきに対する考えにおいて、彼は、枕草子の発想に基づき、自然の典雅な美をもって是とし、万葉風へのあこがれをあらわしている。彼は、冷泉為満・木下長嘯子について、和歌を学んでいる。また、彼はすぐれた目利で、中興名物の茶入を選定し、それに歌銘をつけたり、自作の和歌をもつけたりしている。このことから、和歌的発想をもって、茶湯に接していることがわかる。そして、遠州は、定家の書風をしたい、床の掛け物にしても、定家の軸を好んで使った。

遠州は、春屋宗園に参禅したが、やはり、穏やかな環境と性格によるのか、茶湯においても、柔和な道具のとり合せを好み、禅のきびしさというものは、あまりみられないように思える。

彼の指図によるものと伝えられた茶席として、大徳寺竜光院の密庵・孤蓬庵の忘筌・南禅寺金地院の八窓の席などがあげられる。密庵は、四畳半台目の書院茶室で、床が、蹴込床と框床と二つある。

開口部には腰高障子か襖をたて張付壁には淡い水墨画を描き、違棚を設け、長押を廻した書院座敷に、中柱を立てた台目構えを付設して、茶室をつくっているところに遠州の作風がでてゐる。(典より詳)忘筌は、本堂につづく、十一畳の座敷で、床と点前置を並べ、外には、広縁・落縁がつづいており、その前面に中敷居を通し下方を吹抜いて、内露地の景を内部に連ね、角柱に長押付きという格調の強い構成と華奢にして、古雅な砂摺天井を調和させている、書院の茶室である。八窓の席は、三畳台目で台目切、点前置と並べて床が構えられ、中柱の袖壁にも、下地窓があげられている。書院との境いは襖引違いで、その間仕切から床を少し引込めてそこに嵌板を入れたり、中央に罫口を設け、外に縁をつけたりしている。(典参照)遠州の茶室は、いままでのものより、明るくなっている。また、露地においても、きっぱりとした、規律正しいわくの中にきめ、そしてその露地を苑路によって連続させた、回遊式大庭園を創造した。この庭の様子は、王朝時代の庭園をおもわせるものである。

このような遠州の茶が、武士の間にひろまったのに対して、その頃、公家の間では、金森宗和の茶がもてはやされた。

金森宗和は、織部流をもととし、これに、道安流と遠州流を加味して、彼なりの茶をつくった。宗和好みの茶道具には、竹の窓なし花入・尺八花入・銘法師の木の花入・銘齋藤別当の瓢花入・宗和棚・八角釜・宗和食椀などがあげられる。茶室においては、大徳寺真珠庵の庭玉軒・鹿苑寺の夕佳亭・醍醐侯爵別邸の鎖の間などが、宗

和好としてあげられる。また、俗に宗和のことを「姫宗和」というが、これは、彼の好みが、華麗で、上品なことを示しているものと思われる。

第三節 片桐石州

封建体制は、完全にしかれ、身分制度が固定化し、平和な日々が続く時、人々は自分の身分確保のため、武士は武士らしく生き、民衆は被支配者らしく生きることをしられる。その中で將軍というものは、絶対的権力をもっていた。また、武士は本来戦うことを忘れ、支配者の地位に安住し、遊芸にたしんだ。しかし、その遊芸の流派は、絶対権力者である將軍の好みにより変化せざるをえなかった。茶湯において、二代將軍の茶堂古田織部、三代將軍の茶堂小堀遠州について、四代將軍の茶道師範として片桐石州がつとめた。よって、武家社会の中で、織部・遠州の茶に代わって、石州の茶が流行するようになったのである。

石州は、片桐主膳正貞隆の子で、片桐且元の甥である。片桐氏は、信州伊奈郡片桐村より起り、のち、近江に移り、小谷の城主浅井長政に仕え、小谷落城ののち、秀吉に属した。片桐石州は、寛永元年、従五位下石見守に叙任し、貞俊と名のつた。千道安の高弟桑山宗仙に茶を学び、真行草の三体の茶法を授けられ、貞昌と改名した。寛永四年、父死後、大和・河内、一万六千四百石を継ぎ、大和の小泉を治めることとなった。寛永五年、京都東山知恩院の普請奉行として上京し、京に滞在中、二畳台目の茶室を綾小路柳馬場に建て、遠州・宗和・松華堂昭乗との交流をした。また、大徳寺の玉舟和尚に参禅し宗関と号した。寛文元年「佗びの文」を書き、茶道の

本義が、佗びの精神に存することを強調し、三年小泉に大徳寺の末寺慈光院をたて、玉舟和尚を招いて開山とした。のち、四代將軍家綱の茶道師範となり、「石州三百箇条」をかいて、茶道の規則を成文化した。利休の佗び茶への回帰を志しながらも、自由な禪茶を守らずに、形式化・固定化したのである。

晩年になると、慈光院に二疊台目の数寄屋を増設した。これは、石州唯一の遺構である。この茶室は、田舎風な簡素なつくりの書院に付属してたてられ、床は奥まって亭主床の位置に構えられ、中柱は樺の皮付、天井は平天井になっている。桑田忠親氏は、この席を「凡にして凡ならざる域に達した名席といえよう。」と述べている。大名茶が織部によってつくられたときは、まだ、大名らしい茶であり、利休の茶に武士らしい豪放さを加えたものであった。遠州・石州にいたると、大名らしい茶というより、支配するためによい茶湯、分限の知足をさとする場になってきた。これは、本来の茶の精神である無差別平等な考え方を否定し、封建支配に肩をもつことであり、茶道というものを、むなししい、なかみのないものにしてしまうことである。

このように、支配者階級にへつらう茶が、表面的にさかえた中で、利休の佗び茶を継承し、被支配者の立場に立って独自の茶湯を行なったのが、利休の孫宇宗且である。

第三章 宇宗且の茶

第一節 宗且とその時代

宇宗且が生まれたのは、戦国末期の天正六年、下剋上の時代であ

った。下剋上とは、下の階級の者が上の階級の者をしのぐことであり、実力次第で自分の身分が決まることである。そして、いまだ封建体制が確立せず、ある意味において自由な時代が終ろうとしていた頃である。

宗且の祖父利休は、当時有力であった織田信長の茶堂であった。天正十年、本能寺の変で、信長は家臣明智光秀に殺された。後、山崎の戦いなどにより、信長の家臣豊臣秀吉が勢力をのぼし、天正十三年、関白となった。そして、下剋上の時代に終止符がうたれた。勢力が信長から秀吉に移るにつれて、利休も秀吉の茶堂になった。もと足輕であった秀吉は、利休の説く佗び茶・佗びの風情に共感し、利休は秀吉の援助により、天下一の茶人といわれ、彼なりの茶湯を完成した。しかし、天正十九年二月二十八日、秀吉の豪華なものに対する憧れの爆発により、利休は自刃したのである。

利休の茶が世の中を風靡し、また、利休が自刃した時、宗且は、利休の手許からはなれ、大徳寺の春屋宗園のもとで喝食となっていた。このことは、春屋和尚の「一默稿」に、宗且の名がみられることからわかる。

和宗且試筆韻（天正十七年頃の作）

少年扶起我 日々老衰加

非誦春遊友 読書灯有花

漫歩 且公少年試春之芳韻云

天正啓祚雪初融 日暖風和梅柳濃

他後竜峰必匡席 書窓灯火万枝紅

（天正十九年頃の作）

和旦少年試春韻（文祿二年の作）

吾門他後起宗風 日々參詩吟興濃

御柳官梅春第二年頭花発四時紅

この三首から宗旦は、少なくとも天正十七年から文祿二年までは、大徳寺にいて、春屋和尚の暖かい愛情につつまれて、日々営みの中から、禪というものを修得したと思われる。また、利休自刃の時、利休のそばにいなかったことから、宗旦に与えたその事の影響が、強く、宗旦が一生仕官をしなかった理由の中に、仕官というものの不自由さを教えた事柄として含まれたと思われる。

文祿三年九月、利休の事件で、蒲生氏郷のもとにあづけられていた少庵は、徳川家康や前田利家などのとりなしで、赦免となり、京で、千家をつぐことを許され、宗旦も、利休の没収された道具をかえしてもらい、少庵とともに、暮らすようになる。ここにおいて、千家は再興された。

利休死後、秀吉は、利休の弟子古田織部を、お伽衆の一人としてとりいれ、織部に、利休の茶に武家らしさを加えるように要求したといわれる。この茶湯がのち発展していく大名茶のはじまりである。前述したように、武士の間の喫茶法式というものは、支配者の考えにより変化する。身分の上のものが以前とちがう喫茶法式をとり入れると、その新しくとり入れられた法式は、だんだん下の者にとり入れられてくる。上のものと同じくするということは、下級の武士にとって、動かし難い封建体制において、支配者にそむいていないという態度表明になり、自分の地位を守ることになるのである。佗び茶は、無差別平等の世界である。一つの茶湯という場を通して、自己を知り、自己の上の大なる自然をもつかみとるということ

とは、俗世の身分を越え、ただ単なる個というものになるということである。利休も、佗び茶を説いたが、利休の生きた世は、自身の身分がいつかわるかわからないという下剋上の気風があったために、ある程度、当時の人々にうけ入れられたのである。しかし、秀吉の太閤検地によって、身分制度が確立し、茶湯の無差別平等という意識はうすれ、自分の身分を誇示したり、守るために方式を重んじるようになったのである。このように、茶湯をゆがめた封建体制は、慶長八年、徳川家康が、江戸に幕府を開いたのち、ますます強化され、徹底された。このような封建体制にしばられた茶湯がさかんであった頃、仕官せず、無差別平等なる佗び茶を唱えたのが宗旦である。

宗旦は、慶長六年、春屋和尚より、元叔号を与えられている。

元叔号 洛之宗旦禪人一日寄華賤就老拙

求雅称々日元叔賦短偈以述其義云

只箇一物 利貞兼全

先無量劫 不涉交迂

慶長六載丑曆結制日（一黙稿より）

慶長十五年、古田織部は二代將軍秀忠の茶道師範となり、天下第一の茶湯者として、もてはやされた。同年、宗旦の禪師である春屋和尚が没し、四年後、少庵が没している。

慶長十七年、小堀遠州、大徳寺の孤篷庵をたてる。

元和元年、古田織部が、大坂夏の陣で、大坂方に内通したとの疑いをかけられ自刃し、それまで世を風靡していた織部の茶は、遠州にうけつがれ、それに遠州独自の茶が加わった。遠州は、三代將軍家光の茶道師範となり、武士社会に遠州の茶が広まった。

江岑筆「一疊半指図」に、

右一疊半小座敷指図三十年已前ニ不審庵作ニ而候所、宗左十年余所持致候へは右之座敷ヲタタミ置、今三疊ノ座敷作ル故、宗易座敷寸法以不審作ノ時委右ノ通書付置、柱障子、クグリノ戸利休所持ニテ在之候秘藏致置也

正保四年巳上 未ノ三月 逢源齋

とかかれており、これによると、元和四年頃に、宗且は利休の座敷寸法で、利休所持の柱障子・クグリ戸を使用して不審庵一疊半をたてていると思われる。

寛永六年、紫衣事件により、玉室・沢庵和尚が流されるが、宗且は、二人の和尚と仲がよかったと見え、しきりと心配しているのがそのころの手紙でわかる。

寛永十年七月二十八日付宗受宛手紙に

一、我等事六月廿八日○当月今日まで得大験一疊半小座敷去廿三日

○たて候て今日へやねふき申候

とあり、この頃また、一疊半小座敷をたてたものと見える。また同じ手紙に、

一、朝とくからおき茶湯しかけ昨日○ハ皆々被尋書院にて茶をふる

まい申候

とかかれており、書院で茶をたてていたこともあることがわかる。

同年八月十六日付の手紙には、その一疊半茶席が床なしであり、気易いとのべ、来月の七日に育公と清泉寺の和尚などをよぶつもりなので、古材木で細かい竹ふき板をととのえたとのべている。

寛永十一年六月二十日に家光は、江戸を出発し、七月十一日京都に到着した。將軍上京の際、お伴してきた諸大名と宗且は交流をも

っている。

寛永十二年四月、宗且は江戸へ行ったと思われる。日付なしの手紙に、「今日ハ大名衆馬御見物由候」とかかれており、「徳川家紀」に、四月廿日、大名衆が八代須河岸で馬見物をしたことがでていゝる。また、五月四日付宗受宛手紙に「京への文書つかわす」とあり、宗且が京よりはなれていることは確かである。この前後の手紙に修理殿という名がでてきて、宗且の日常のことを世話して見えてくるが、修理殿とは、山口重政のことである。

寛永十四年島原の乱がおこる。

寛永十六年、宗受の生駒藩への有付の話と、宗且が京についていたという内容の手紙があるので、宗且はそのころまで江戸にいたと思われる。

正保元年正月十一日付宗佐宛手紙に、

一、四疊半たて申候、去人たててくれ候はんやうニ候へ共未左右なく候而今夏中ニ柱用意候てたて可申候

とあり、利休の四疊半と同じような茶席を、つくるつもりらしい。同年二月三日付手紙に、

一、四疊半たて候てはやぬる計ニ候、いかにもそさうニ立候、此方無事皆々そくさい候我等息災故四疊半も出来候、東海寺ニ而も三ふく一つの賛被成故四疊半仕候由可申候

とあり、夏中かかると思われていた四疊半が三月までにできてしまいい、いかにもそまつに立っている。しかし、この四疊半がたつたのは、元氣であったからであるとのべている。

正保三年、宗且は裏への隠居を考えたようである。五月十八日付宗左宛手紙に

一、うら作事可仕と存候一メ目ニ而と存候、先日少齋見上とて金式十両給候、それにて、たてたく候と存候少齋懸ニ候可心易候細くはなし候四疊半一疊半出来候猶追而可申候

とあり、七月晦日には、

一、うらえ作事内造作ニ候頓而ぬり九月ニハ、口切を菓子にて可申

覚悟ニ候

とあり、八月二十三日付手紙には

一、うらの家やうく、出事昨日掃地候六十日かかりきもせいくたびれきり申候、正月ニ上候ハバ其時屋うつり可申候、内々うつりハ此朔日ニ可申と存候

と、十月十日付手紙には、

一、昨日相調去月朔日ニ屋うつり先申候

とある。このように、宗旦の隠居は、京都の大商人後藤少齋の援助により、裏庭に、四疊半・一疊半の茶室をたて移り住むことによつてなされたのである。

正保四年、小堀遠州が死去し、大名茶は、片桐石州により動かされるようになった。

慶安二年十月八日付宗左宛手紙に、

一、此方ノ沙汰ハさひたる事はやらんとの事と申方候其心得あるべく候茶湯之師共そら事を数年申されあらわれ候よしにて候うつけてもわれくかやうニ正直なるハよく心得候べく候

とのべ、自分のうつわに正直にして、茶湯をしなくてはいけないと説き、当世の茶人で、わびているのを好むとうそをついているが、それはいけないと批判している。また、十月十一日付手紙には、

一、先書如申候石州金盛うそともあらわれ江戸ノわらい草由候我等

体なりともましたるべく候おかしく候

とあり、八日付の手紙で批判しているのは、石州をさしているものと見え、石州が、利休に復古しようとしていると述べたのに対してうそをいっているのとべているのではないかと思う。金盛をも同様批判している。

宗旦は、万治元年十二月十九日に、

一息切斷 咄々喝々

看今転機 審茶烟作

虚空めがこくうにとうと生来て

又くうくと成鐘の声

という辞世の句を残して死去した。

第二節 宗旦とその家族関係

宗旦の祖父は、千利休であると前述したが、実父については二つの説がある。一つは、利休の子道安であるという説と、もう一つは、利休の後妻宗恩の連れ子少庵であるという説である。宗旦の三男、江岑宗左が、その就職先である紀州家へ差し出した由緒書に、「少庵妻子惣領、干宗旦、号元伯、咄々齋」とあるのをもって、少庵説が従来有力である。この度、「宗旦文書」の中で、少庵ではないのかという説が、発表されたので、道安説がもち出されるようになった。しかし現在、両説とも肯定できる明確な資料はない。

利休自刃後、道安は、諸国を歩きまわっており、少庵は、蒲生氏郷のもとにあづけられ赦免ののち、宗旦とともに千家を再興している。「道安は上手目利かず、少庵は下手目利なり」（茶道旧聞録）

と、宗且がいったとも伝えられている。道安は、少庵千家再興後、細川忠興の招きにより、豊前におもむいて、三百石の知行を与えられたといわれ、その流れをくんで、宗和流と石州流が生まれたといわれる。

慶長十二年に道安は没した。慶長十三年、松屋久重が千家へ訪れたとき、少庵は、すでに隠居していたと思われる。(堀内宗著 宗吾宛 且の不審) 少庵は、四年後に没している。

宗且には、五人の子供があった。宗拙、宗守、宗左、妙空、宗室である。長男宗拙は、理由はわからないが家を出て、宗且に相当心配をかけている。彼は、西加茂の正伝寺塔中に庵を結んだが、宗且より前の慶安四年に没している。宗拙が宗且の有付先を探してきたのに、するきがないなどとよく宗且はおこっていたが、宗拙亡去の知らせを、宗且は、

宗拙去六日死去候絶言語事候閑翁宗拙候と短い言葉で実に淡々と、宗受に告げている。二男宗守は、はじめ塗師吉文字屋へ、養子に行つたが、慶安二年十二月十六日付、宗左宛の手紙に、

甚右法躰宗守ト申候玉舟馳走故任合能候候はしをかこい十九日ニ
ひらき候

とあり、法躰となつて、茶匠として独立したものと思われる。そして、承応三年十月二十日付宗左宛手紙に、

ぎんざ望候而一口守ニ主つかせ候て置候へハ貴所ノ為ニと才覚候
銀座年寄我等ニ懇ニ候間可頼存事候

とあり、他の手紙にも、銀座を支配している後藤少齋に頼み、宗守が銀座の株を一口もてたらと望んでいる。宗守は、のちに武者小路に官休庵をたて、武者小路派をきずいた。また、武者小路派が、有

付できたのは、宗守の子文叔宗守の時で、高松藩の茶堂となつた。

宗拙・宗守の母は、はっきりわからないが、宗左・妙空・宗室の母は、東福門院と関係があると思われ、名を、宗見という。三男江岑宗左は、幼名を十三郎といったが、寛永十年二月に、玉室和尚の世話で、肥前唐津城主寺沢広高へ有付が決まったのち、宗受と改名した。宗且は、息子が、利休と関係の深い寺沢家へ有付できたことをたいへん喜び、寺沢氏が京に上つたとき、茶湯によんでゐる。しかし、寛永十四年、島原の乱がおこり、島原の領主寺沢兵庫頭堅高は、責任を問われ、寛永十五年四月、天草の所領をとりあげられ謹慎の身となつた。そのため宗受は職を失う。宗且はその間、江戸にいていたと思われるが、なにくれとなく気をつかい、大変、心配していた。寛永十六年九月、玉室・玉舟和尚の世話で、宗受は、生駒藩に有付し、宗佐と名を改めたが、翌年、生駒藩主高俊の家に騒動があり、領地没収となつて、またもや、失職した。宗且は、宗佐の有付を、柳生氏などに頼み、寛永十九年、宗佐は柳生宗矩の世話で、紀州徳川頼宣に有付した。正保三年宗且は次のような讃状をかき隠居の決意をしたものと思われる。

当屋敷家但南北四十一間東西十六間南方十四間あり千宗佐ニゆつり置此やしき内北十六間四方隠居屋しきニ定置候其段心筆書置可申候後日如此如件

正保三年卯月十三日 千元伯 宗且

宗且は、北十六間四方を隠居屋敷に定め、あとを三男宗佐に譲り、四男宗室とその隠居屋敷に移り住んだのである。宗左は、現在の表千家をきずいた。妙空は、久田宗利のもとに嫁し、半床庵宗全を産んでいる。四男宗室は、幼名を長吉(郎)といい、寛永十八年、

医師野間玄琢の弟子になり、名を玄室と改めて、医師の勉強をした。しかし、正保二年十一月十四日、玄琢が死去したため、玄室の医学への道はとざされ、茶で身をたてることにした。宗且は、玄室の有付を、大徳寺の和尚達のほかに、遠州・石州にまで頼んでゐる。承応元年、玄室は、宗室と改名して、前田利常に有付し、三ノ丸に屋敷を賜った。宗室は、のちの裏千家をきずいた。

以上のように、宗且は家庭関係は複雑であったが、五人のよき父親であり、茶湯の先輩であった。

また、仕官の不自由さ故に、茶湯の精神が曲げられはせぬかと、一生仕官をしなかつた宗且は、子供らの有付には、いろいろ奔走したいへん神経をつかつたと思われる。これは矛盾しているように思われるが、千家を後世に伝えるために、その時代に適した生き方として、宗且は子供らに仕官を進めたものと思える。また、子供らも、いろいろな流派を、きずき、個々独立し、広く大名だけでなく、町人の中にも茶湯をひろめ今日に至っている。

第三節 宗且の茶における交流

宗且が、禅のおしえをうけたのは、春屋宗園からである。春屋和尚が、宗且に囑望していたことは、前述した「一黙稿」にみられるが、宗且は、春屋和尚のことをどう思っていたのであろうか。堀内宗完氏が「宗且の禅」の中で、「松屋会記」慶長十三年二月二十五日付の「書院へ出ル 上段ニ疊敷也 是春屋ノタウカウカ、ル」を、引用して、「ここにある、春屋タウカウ（道号）」は、宗且自筆のこの圓鑑国師号ではないかと考える以外、現在、他に該当するものが考えられません。おそらく、宗且は国師を敬慕するあまりその

名号を床にかけておられたと考えられないことはありません。」とべているように、宗且は、春屋和尚を尊敬し、それに影響されるどころ大であったと思われる。春屋宗園は、享祿二年に生まれ、慶長十六年に没している。号を春屋、諱を宗園、姓を園部といい、山城の人であった。笑嶺に参禅し、永祿十二年三月大徳寺百十一世となった。また、南宗寺の第三世、筑前崇福寺の七十七世となり、大徳寺内に三玄院・電光院・貞嶽院をたて、近江の佐和山に瑞猷寺をたてて開山となった。天正十四年には、正親町天皇から朗源天真禪師の号をもらい、慶長五年には、後陽成天皇から大宝圓鑑国師号をうけた。このように、僧界の高位にいたその頃、宗且は接したのである。

春屋和尚死後、宗且は、玉室和尚に参禅したものと思われる。玉室和尚は、春屋の法嗣で、瞋眠子と号し、大徳寺百四十八世である。また、紫衣事件により配流にもなった人である。玉室は、宗左の肥前と高松への有付の世話をしたり、宗且が茶室をつくるのを援助したりしている。そのほか、大徳寺の玉舟・江月・天祐・江雪・江雲・清岩和尚とも親しく交わっている。玉舟宗和尚は、宗且の次男宗守が官休庵をたてるのを援助したり、四男宗室の加賀有付の世話をしているし、清岩和尚とは、今日庵の由来の話がある程、深い交流がある。

紫衣事件の際、皇室側につき、幕府から罰せられ、玉室和尚とともに配流された沢庵宗彭とも、宗且は交流があった。配流された当時は心配したのは、前述の通りであるが、宗且は貧乏生活をしているので、茶室つくる時は、沢庵に賛をかいてもらいそれを売ってその費用とした。

沢庵和尚ノ給候墨蹟金一ツ一、有付候て此暮ノ用意先緩こと仕舞可申候心安候而東海寺ノ方ヲおかみ申候

(寛永十八年十二月十三日 宗佐宛)

また、同年十二月晦日付手紙に

客人日こ有事候此〇ハ一入仕合能候而仕舞東海〇之墨跡にてすまし候東海寺の方を拜申候

とあり、沢庵の墨蹟で茶湯をしたといっている。このように、沢庵には、宗旦はいろいろと援助してもらい、また、その援助を素直に喜んでゐる宗旦であった。これは、宗旦の素直な性格もあると思うが、二人の親交の深さをしめしているものと思われる。

沢庵和尚は、大徳寺百五十四世で、紫衣事件で上ノ山に流されたのち、許され、家光に迎えられ東海寺の開山となつた。茶湯を小堀遠州にない茶禅一味の生活を送り、「不動智神妙録」をかいた。宗旦は柳生氏とも交わりがあつたが、これは、沢庵和尚の紹介によるものと思われる。

柳生但馬守宗矩は、父宗敵のあとをつぎ、将軍家康から家光までの指南役をつとめた、新陰流の達人である。彼は、剣を戦うものから、わざというものにかえ、それを通して、道というものを修得しようとした。宗旦と柳生は、茶にまねかたり、まねいたりしているが、道を追求する者としての連帯意識というものが、二人の交流をつづけていってはいかないかと思う。

寛永十年八月頃、宗旦は一疊半茶室をたてた。十月十八日、近衛信尋応山は、左中將の裏辻季福を伴い、暁七ツ時御成した。

近衛応山は、後陽成天皇の第四皇子で、慶長十年関白前左大臣、近衛信尹の養嗣となり、元和九年、関白代長者となつた。正保二年、

剃髪して、応山と号した。茶湯を、織部と、遠州に学んだが、宗旦は口切のときには、かならず応山を招き、応山もよく宗旦を招いて親しく交わつたことが「近衛尚嗣公記」にみられる。また、宗旦の手紙の中に

茶湯さひたる事近様御好候てさひ候事尤事候茶や四郎二郎物語候とあり、応山がさびた茶を好んでゐることがわかる。

寛永十年十月廿五日付宗佐宛手紙に

一、第一やしきの事光悦周防殿へ申され何時はなし可申もまゝに成候五十枚ならはなし可申候可心易候光悦一段勢入茶湯ニよび其後も被參候懇ニ候可心易候

とあり、本阿弥光悦に洛中にあるやしきの処分をたのんでいる。本阿弥光悦は、刀剣の鑑定・磨礪・淨拭を本業とするかたわら、書画を学んだり、茶湯を織部に学んだり、いろいろなものをごなした。茶道においては、織部ののち、遠州・宗旦にも学んだといわれ、利休を名人だと認めながらも、秀吉の権力と結びついて茶道を俗化したと評し、利休よりも紹鴎や宗旦の茶を崇敬した。(茶道評 典より)

彼の行状をしるしたものに、「本阿弥行状記」があり、ここには、宗旦のことを我が友と呼んでいる。応山公に対する宗旦の態度、仕官に対する宗旦の態度を、すばらしいと評価し、宗旦の意志・信念を認めた。(注5)

寛永十一年将軍家光の上京の際、お伴として上京した諸大名とつきあつた宗旦は、七月十七日付の手紙で「大名衆事難成由申候」といっており、大名とのつきあひは、あまり好まなかつたようである。しかし、子供の有付先の大名には、上京のおり、茶湯をしてさしあげるなどといろいろの気をつかつてゐる。

寛永十六年に、北山鹿苑寺第四世、鳳林承章は「隔囊記」をかきはじめた。彼は、勤修寺晴豊の息子として、文祿二年に生まれた。叔母が、後陽成院の母にあたるので、後水尾天皇の外叔にあたる。

よって彼は、後水尾天皇の文庫の相手として禁中仙洞に入入りした。鳳林はまた、俳諧にすぐれており、平民文学を普及した。「隔囊記」には、鈴木半茶氏の調べによると、宗且との交流関係記事が六十六ヶ所、宗和関係が五十余カ所ある。宗且と鳳林とは互いによく琵琶をかきならしたり、宗且の茶席で鳳林が白つづじを生けたり、宗且が削っておくった茶約をもう一度削り直して渡したり、鳳林が宗且に貸した借用証書をかえしたら、宗且は喜んでか、十数年も年がはなれてゐるのに、親しげな友人としてのつきあいが二人の間にみられる。宗且の実直さがわかり、鳳林のやさしさがわかる。鳳林が、宗且のことを色々かいてゐるのに、不審伝来の二百三十九通の宗且の手紙の中に一度も鳳林の名をみいだせなかった。寛永十九年頃、宗且は、人に頼まれて、茶約を削ってあげてゐる。

今川殿茶約所望之由候而遣候

菅沼官内〇も茶約所望ニ而削遣候

同じ手紙に、

かの探幽へ知人ニ御成候而絵之礼御申あるべく候とあり、幕府の御用絵師となった狩野探幽と知りあいになったものと思はれる。狩野探幽は、戦国時代の英雄主義に呼応して豪快な裝飾画を創始した永徳の孫であり、その流れをくんで、狩野派を繁栄させた人である。宗且は、探幽に絵を、沢庵に賛をかいてもらい、三幅一対として、それを売り、四疊半を建てつつもりであった。し

かし、手紙に、

東海寺の賛事承候へハたんゆう絵長老氣ニ不入候て賛不成由五兵次物語候三ふく一対を大略百メニ取候ハンとの事候間同ハ賛被成被下候へかしそれも不被成候は不及是非候

とあり、沢庵が探幽の絵を気に入らないと断つたと嘆いてゐる。沢庵も思い直したのであるうか、十日後の手紙に次のように書いてゐる。

賛出来去廿四日之日付之状共昨日参着満足不遇之候百メノ取て候ハんとの事候間満足事候則礼状進候

そのおかげで、宗且は四疊半をたてることができた。また、前述したように隠居所をたてるときは、宗且は、新藤少齋に援助をしてもらつてゐる。

宗且は、一生仕官をしなかったが、後水尾天皇の中宮である東福門院には、茶の指導をした。慶安三年九月二十七日付宗佐宗室宛に一、女院様御手作えぬいのかせんを可被下旨、一兩日ニ出来三宅玄番ニ可被下由候外聞と申責所達えたからに成可申候町人如何様義無之候其上去年仕候花入共四ツとりておかせられ御ひさうのよし候外聞満足申事候

とあり、女院に縫の歌仙をもらい喜び、町人でこのような名誉をうけて、宝とするといつてよろこんでゐる。また宗且は、女院に、花入・ぞうげの茶約などを進上してゐる。東福門院との交流の際、爪紅台子や紅巾などを、宗且は好んだ。宗且の他びた好みとは、ちがつてはなやかなものである。このことから、宗且の茶の広さを知ることができる。

宗且は、いろいろな身分の人々と交わつた。將軍関係の人々・皇

室関係の人々・町人・芸術家・僧侶などで、それらの人々との交流を通して、一被支配者として、世を動きに触れながら生きていたように思う。しかし、大名とのつきあいはあまり好きではないといひ、京の人とはあまりつきあわないという。当世流の茶人とはつきあいはしたくないという。親しい人々と茶湯は楽しみたいものだといい、大徳寺の僧侶たちをよんで茶湯をする。やはり、宗旦が、心を許してつきあえるのは、自分の理念と等しい理念をもった大徳寺の僧侶たちであつたような気がする。

そのように、自分の佗びの精神を大事にしている宗旦であつたら、弟子も、道をきくという形で宗旦に接し、修得したものを自らに還元し、それぞれ流派をきずいたのである。利休の弟子が、大名など武士が多いのに比べ、宗旦の弟子は、彼の交流と同様、種々様々な身分の人であつた。杉木普齋・藤村庸軒・三宅亡羊・山田宗偏・久須見疎安などを、弟子としてあげられると思うが、特に、山田宗偏は、宗旦の信頼があつく、小笠原家に宗旦の代わりに出仕し、不審庵・今日庵の庵号をもらっている。

第四節 宗旦好み

一、茶室について

茶室は、茶湯を行う場であり、その人の美的表現、そして、茶に対する姿勢表明の場である。よつて、茶室に入り、そのうける感覚や印象は、亭主の美意識につながる。

利休は、佗びの厳しさを出すために、茶室を狭くしていった。張附壁を、塗壁にした。宗旦は、一畳半茶室を好み、利休の好んだ室床を、ゆかまで土塗りとし、そこにだけ紙を張った土床というもの

を好み、室床を、一層佗びたものにした。その土床を、宗旦は、出入りの土斉につくらせた。土斉は、のち、宗旦に茶を学び、別号を土庵、飯後軒ともいい、生涯、濃茶を用いず、薄茶を点てたといわれる。

また、宗旦は、色付けを濃くした。当時、良質の材料を使用したため、うすい色付けをするのがはつた。これに対して、色付けを濃くしたら、悪い材質が、かくれるといつた一層佗びた考えから、このことは、でているものと思われる。

宗旦の茶室は、このように、視覚的なものを、重視するのではなく、その中に入り、他のものに目をうばわれることなく、自己の内面に没頭できるような精神的緊迫を重んじているように思える。

宗旦の若い頃、少庵存命中の茶室を知るに、慶長十三年二月二十五日、松屋久重が、京の宗旦と少庵を、訪れているのが、「松屋会記」に見え、宗旦・少庵の茶室についても、述べている。

戊申二月二十五日 朝飯過

一、京都千宗旦へ 不時ニ 久重啓人

宗旦の茶室は、南向に建ち、二畳の客畳と一畳の点前畳とを、障子でわけた三畳敷の席である。このように、客座と、点前座を分けた形を道安囲といい、主客を意識し、謙虚さを示すものである。天井は、三畳通しの板天井であり、にじり上りのくぐり戸を使用している。路地は広く、飛び石がしかれ、手水鉢には、大きな礎石がすえられていると、久重はかいてる。宗旦が建てたのかはわからないが、宗旦は、道安囲を好んで使用していたと思われる。

久重は、午後から少庵を訪れている。

二月二十五日屋 京都少庵へ不時ニ 久重啓人

少庵の茶室は三疊の短い側に床がついてるので深三疊という。また勝手口が、花頭口のような形式ではなく、襖引違い建てとなっている通い口があることから、利休の大坂座敷にある茶室の写しであると思われる。少庵は、こののち、平三疊台目を好んだ。

宗旦は、一疊半の茶室を三回建てている。寛永十年に建てたものと、不審庵と大徳寺の芳春院一疊半茶室である。寛永十年にたてた一疊半は、宗旦の手紙によると、七月二十三日からたて始めて、二十八日に屋根をふき、八月十六日に壁を塗り、出来上ったらしい。この一疊半は、床なしで、非常ニ気易いこと、又、床なしの一疊半に軸を掛けるには、中柱のへいにかけること、などと宗旦はいつている。この一疊半の構成は、わからない。

不審庵一疊半は、江岑筆「一齋半指図」により、元和四年、利休の座敷の寸法をよりどころにし、利休所持の柱・障子・くぐり戸を使ってたてられたことがわかる。炉は向切で、まわり五寸八分の太さのゆがみのある女松でつくられた中柱がたち、高さ二尺一寸五分の吹抜をあげ、棚は、幅八寸八分、長さ一尺三分、厚さ四分で、五分の端喰を入れ、三分の釣竹で、二尺七寸の高さに釣られている。柱の太さは二寸五分、または、二寸九分半で、クダリの高さ二尺二寸四分、横一尺九寸四分で、その上に下地窓がある。下地窓は、東西両壁にもつくられ、風炉先窓も設けられている。この茶室は、南向きで、北から、南へ葺おろし屋根がある。床はなく、勝手口はぬりまわして内部の壁もうわぬりはせず、一へんぬりである。天井は、化粧屋根裏で、勝手口の外に、杉くれ縁張りの勝手がついてい

る。芳春院の一疊半については、慶安三年の宗旦の手紙に「玉一疊半

たて」とあるが、このことであると思う。「予楽院家鯉槐記」の、享保十二年丁未三月十三日の項に、

此程、大徳寺へ成ラセラレタル御噂、マチノ也、トカク今ノ世ノ、宗旦流ト云フモノハ心得難シ、昨日芳春院へ御成ニテ、御覽ナサル、ニ、又宗旦ハ各別ノモノ也、先兼テ一疊ダイメノ囲居ト、御聞ナサレシ故、三人マデハイカバト思召テ、左典厩一人ヲ召連ラレタリ、行テ御覽アレハ、三人マデハ楽ニ直ラル、上手ナル立様ナリトテ、御噂ノ趣ヲ左ニ記ス。タトヘバ、書院ノ床ノウシロニテ、カタハイニ屋ヲロシテ、ケラバノ方ヨリ入ルヨウニ、コシラヘタルモノナリ、

とかかれてあることから、この一疊半は、書院の床のうらにつづいてたてられ、片流れ屋根で、妻の方から入れるように躡口をこしらえたことがわかる。また、炉は向切で、風炉先窓があげられ、勝手付に大円窓がつけられている一疊台目であることも知られている。同じく「槐記」に、

コレモ兼テ聞及シニ、ツキリニ疊ハツキクダシノモノニテ、ノキノ方ヨリ入ルヤウニ承ル、ソレ珍シト申上ゲ、サレバトヨ、脇ノ方ニテノキヒキク、勝手口アキタルトキニ、低キ屋根ウラノミニテ、イトモ殊勝ナリト仰ラル。

という問答があり、天井は、客座の方が高く屋根の流れにしたがって点前座の方へ下がり、化粧屋根裏となっていることがわかる。

以上の様な一疊半は、佗び味に加えて、それぞれ、場所・用途に応じた工夫がされているが、さらに佗び味を追求したのが、宗旦隠居時の今日庵であったと思う。「隔囊記」の正保五年五月二十八日付の条に、

今朝於宗且而、有茶之湯也、彦藏主同道也、宗且隱居之家初見之也。座敷一疊半也

とかかれており、慶安二年卯月五日の「松屋會記」には、
隱居ノ二疊敷、但、一疊半敷ヲ、残りハ板敷也、中柱有之、但ヌキハ無之候、二重筒板畳ノサキニカケテ上ノ重ニ色々様々花多ク入、下ノ重ニテッセン花入筒ハ自身切候由。

とある。このことから、この席は、一疊半に向板を加え、中柱をたてたもので、通常の台目席のように吹抜がなく下の方まで袖壁であったと思われる。また「松屋會記」同条では、

タウコノ所ヲ二枚戸ニシテ、一方ニハ茶入茶碗棚ニ置テ、又スエノ方、一方ニハハントウニ水アリ、水下モ何モ居ナカラノ仕舞也、是モ利休云年寄テノ仕舞也

といい、宗且は、水屋洞庫を使用していたと思われる。陽明文庫に、宗且が小早川某氏に洞庫のことについて述べている手紙がある。

たうこの本大方書つけ候て可宣日候、内々参而て申上べくと存じ候処咳気げに御在候て右の間かくの如に候と覚えわすらい候〇〇候存候何とも見廻無申上候、たうこの中内之竹針二本御在候ハ参而可申上候たうこまどりの下も皆板にて候たうこの前に、志きいは、右ノ障子立申候、かもしはその寸ノ板の内ニ可存〇咳気参りて参而可申上候。

この手紙に、たうこのことを説明した上に、宗易のたうこの本は高さ一尺九寸、はば二尺五分、ふかき、たみ志きいより〇〇一尺五寸五分たなのはば九寸七分、たなの高さ、天上より〇ハ七寸、たなにあつき四分……

と別の手紙(同氏宛)にかかれています。このことは、宗且が利休の茶湯を基にしていることをしめしていると思ふ。

正保三年の隠居後、宗且は、「我は七十六歳にして又隠今日あんと成る。」といい、承応二年十二月十八日、四疊半座敷開きの茶会を催している。この四疊半は又隠とよばれ、利休の四疊半を基にしてつくられたといわれている。入母屋造風茅葺で、妻に又隠の額を掲げ、一端に躡口、その上に下地窓、左方に刀掛を配して、正面の景観を整え、落ち着いた風姿を形づくっている。内部は、四疊半本勝手洞庫付き、躡口から正面に床を構え、天井は、ノネ網代張篠竹押えと化粧屋根裏の構成点前置の入隅は、下方四尺四寸を塗廻して上部だけを柱を見せる楊枝柱の手法を試みている。露地においても、当時流行していた遠州のきっぱりした規則正しい石のおき方はちがいが、利休の自然らしさを基調とし、探幽作「宗且まめまきの図」でみられるような、自然な足どりにあわせた石の配置を考えてゐる。

茶室において、宗且は、不審庵・又隠のように利休の茶室を正しく継承し、その中で、利休の室床をもっと佗びた土床にしたり、洞庫先の柱を隠したり、利休よりも天井を低くし、その低い天井に、化粧屋根裏の斜面を、組みあわせることによつて威圧感をうすくしたりして、利休の佗び茶を深め、その佗びの表現を追求し、彼なりの茶室をつくっていったと思われる。

二、茶道具について

茶道を大成したといわれる利休は、彼の鋭い鑑識力により、いろいろなものを創造したり、いろいろなものを変化させ彼の好みを、うち出した。利休死後、利休の弟子古田織部は、彼のすぐれた独創

性により、自然らしさを重んじた利休の好みに対応して人為的、且つ、芸術的な好みを打ち出し、*ケイキ*な趣をつくりだした。織部の弟子小堀遠州は書院茶の法式に、万葉の古典趣味を加えて、*ゞきれいさび*といわれるような、きっぱりとしていて、その上、静かで落ちついた趣のあるものを好んだ。公家の間でもはやされた金森宗和は、*姫宗和*の名にふさわしい繊細・華麗な王朝趣味をおしすすめ、遠州につづく片桐石州は、格式ばった、大名らしいものを好んだ。

名物意識・種々な好みもの重視の中で、宗且は、利休好みを深くほりさげ、自然らしさ・対象物の簡素化をはかり、その中において、精神面を強くうち出したのである。

宗且の園城寺の花入に関する話がある。

竹に割れ目があって、そこから露が、滴っている。その時客が来て、居間に請じた所客は花入を見るなり、露が畳の上にこぼれているといった。その言葉聞いた宗且は、「この露が命である」といった。

この話は、宗且の規律にはめこまれたものへの反発を表わしており、また、宗且が、表面的・外面的なものを、二次的なものとし、その対象物を通して自身の精神の自由な表現を求めたということを表わしていると思う。宗且は、名物を重んじていない。彼の手紙に、

手前ぼくせき二ふくうり候て先何とやらんいたし候、少庵道具も入江五浪右衛門と申人肝煎にて小道具共少々遣候

とか、

四方釜、二重筒人ほしかり申候あり所申しこし早々待申候

とあるように、四方釜・二重筒・少庵道具という名物を、ほしいという人に、簡単に都合している。

宗受が、利休とも関係のあった寺沢家に有付した、寛永十年の宗受手宛紙に、

一、利休道具事

一、円座かたつき 上様ニ今あり

一、しりぶくら 三齋ニ今あり

一、茶壺ははしたて 北国にてやけ候

一、閑居 阿波寺ほうあんニ今あり

一、びせんつぽ 行かたしらす

一、柴ノ庵 志摩殿ニあり

一、せんべい 我等ノ也

一、たびノ壺かごかき 行さきしらす

一、硯ハかわら硯 浅但馬又

一、ふぼくハ上様ニあり

一、花入つるノ一声 上様ニありかねの物也

大方加此少あん道具

一、辻堂茶入せと也少庵むかし大坂ニ而一メニかい候其後ふなこし所へ百五十メニ行それ〇古織へ金十枚それ〇いこまうた殿へ

金二百枚ニ行

一、丸壺ハならニ而三枚ニ渡辺勤兵へ三十枚それ〇三千メニいつ

かたへやらん行候由候

一、大灯ノ墨蹟もアリ大夫殿ニありそれ〇いつかたニや候由候

一、上様ニある名物共

一、円悟墨跡しゅ光持聚楽ノ時ハ富田ニアリ

一、御茶入なけ頭巾もすや是もむかしハしゆくわう也

一、ならしば 富田ニあかり

一、相国寺 相国寺〇出

一、つるノ一声花入

一、一休初祖菩提ノ一くたり物しゆくわう表具むかしハ安部ニあかり其後堀尾帯刀殿ニあり上へあかる其外色く候へ共かくれ不

申候

一、うらくノ道具

一、くさへや かたつき

一、京ごくなすび

一、大なすび

一、玉かきぶんりん

一、丸壺あり

一、茶入ノ上るいハ先日与作ニ状書付候其外門跡 六条 高山殿わび介 大坂
しぎ 大坂 めんはく

一、北国肥前殿ニ茶入このむらや

一、密庵ノ墨蹟これハむかし薬院ニアリ利休ホメ候物也

一、せとかたつき辻堂、開山其後ハ宗円ニ一ツ、紹智ニ一ツ

一、佐竹殿ノ茶入住吉屋宗無也

一、古織ハ芝山所持之せいたか也茶入

一、丸壺ノ開山ハ後藤所持今大名衆ニアリ

一、大坂茶壺四十石

一、金盛雲州ニ不干ノ茶入アリ

と、利休の道具のゆくえを詳細に知らせているが、

大方おもひ出したる分也道具ノゆらいしり候事数奇ニ不入候利休

きらいノ事也

と、すぐにいっている。物の由来をさぐることは教寄ではないのである。宗旦は、名物というものをあまり重規しないし、また、自分の精神にあつたものであれば、「花入ひょうたんにて会候やきちやわん共も二ツ三ツ町かい候」と、町で買うこともした。市井のものをいうという態度、これが、大名の中で、はなやかに活躍している大名茶の提唱者との違いである。

宗旦は、一閑張りを好んだ。一閑張りは、木製の原型を使い、漆や糊で紙をはりかさねて、型からぬきとつたものを素地としたもので、明の亡命者である飛來一閑により、つくられた。つやけしの黒と朱漆の二種類ある。おさえられたつや・紙の素朴な肌あいなどは、簡素な、内に秘めた美しさを追求する宗旦に、あっていた。一閑張の棚には、一閑ヘキ目丸卓があげられ、これは、利休好の桐木地丸卓の二本柱の下方で反りをもたせてはめ、上下に小さな雲板を入れ、地板のうらに三ヶ所足をつけるという技巧はこらされてなく、平板柱を、上下の円盤の外側に直接打ちつけるという簡単なものである。その他に、長板や、高麗台子があげられる。一閑張の茶器においては、下地となる片木を十二角以上に折りたわめた上で一閑張に仕上げた折撓棗や、紙棗茶湯棗（一双盆二枚漆）・川太郎棗・鶯棗・一服入棗などがあげられる。また、香合としては、桃香合・烏帽子香合・三日月香合があげられる。三日月香合は、受け月になっていて、表面に片木目を見せており、外が黒、内が朱になっている。桃香合には、二種類あり、一つは桃の形をしていて折撓先丸にし全部黒である。もう一つは、内側が朱塗で、蓋の甲に、花と葉の金蒔絵があるもので、宗旦の好んだ爪紅台子と何らかの共通性をも

見いだせる。

そのほか、一閑張菓子器では、四方銘々盆・桜銘々盆・へぎ目黒四方盆、炭斗では、神折敷炭斗、煙草盆では、折携長煙草盆・黒手付むし煙草盆・釣瓶煙草盆などがあげられ、雑品類では、不角切折敷・山折敷・溜湯盆一双・入子肴八寸・盃台・二重重箱・長文庫・文箱・天目台・四方茶入盆・茶通箱・黒一閑張茶杓などがあげられる。

塗り物を、宗旦は、利休の寸法に基づいて初代中村宗哲によりつくらせた。初代中村宗哲の室は、宗旦の二男宗守の娘である。また利休が黒塗を好んだのに対して、宗旦は、溜塗を好んだ。これは、黒塗の格式ばったおもしろさに対する溜塗の軽妙さを好んだからであろう。そして宗旦好みの溜塗は、木の目がすけてみえるものであった。黒真塗りの三日月香合・東福門院が好んだ橙箔置（銀箔を外に押し出し、内部を黒塗りにする）・爪紅台子・溜塗大小雪吹・裏菊蒔絵棗・面桶椀などを、宗旦好みの塗物としてあげられる。

また、宗旦は竹に佻びを見いだしている。竹丸太舟・銘平宗盛の花入など、竹細工を、いろいろとつくっている。宗旦は、茶杓をも頼まれてつくったり、世話になった人にお礼として削って贈ったりしている。宗旦の茶杓は、佻びの味を出すために左右均等ではなく、權先の左肩をおとし、ごつごつした荒らさを出すために節裏のくぐりを少なくした。そのうえ、従来、うるし拭きをしていたのを、竹の真实性を欠かさないためにしなかった。宗旦好みの茶杓として、二人しづか、よろほしなどをあげることができる。二人しづか、權先から節へかけて二条の樋が流れているのでその銘がつかい。また、二本入の同銘の茶杓がある。よろほしは、きわめて細い

茶杓で、少し横に曲っており、佻びたものである。

焼物においては、宗旦は楽家と関係がある。利休が、二代目の長次郎を得て、焼物をいろいろつくらせたのに対して、宗旦は、三代目の道入をもってつくらせた。

宗旦と道入の交流について、「楽焼代々」に、

ノンコウ名の事、宗旦ヨリ一重切竹ノ花入ヲ切テヤラル。此花入
茨屋安左衛門方ニアリ。ソノ銘ノンコウト有リ。是ヨリノンコウ
ノト呼ンデ本名トナル。是ヨリノンコウ方ヘ行ンナド度タイ
ハレケリ。此花入ヲ楽ニ細工ス、ノンコウ山田ニシバラク住事
アリ。

とかかれています。道入ののんこうという名は、宗旦へ贈った花入からついたものであるというのである。二人は親しい間柄であったように思えるが、宗旦の手紙の中には、「ちゃんやき」としかでてこない。のんこう作赤染茶碗では、銘熟柿・一介・巴などがあげられ、長次郎作黒染では、銘あやめ・ムキ取・まこも、赤染では銘風折・濡鳥・早馬などがあげられる。水指では、低目の円錐形、口は外部にまるく張り出て上部で抱え、口造りは五つの山を見せ、落込の共蓋の鐘様堂があげられる。

宗旦好みと伝えられる釜に、無肩四方釜があげられる。利休好み、与次郎作の四方釜が甑口を少し立て、肩と胴の境界の線をはっきりさせているのに対し、肩と胴の境界線を消し、肩の下がりも無肩といわれるようにぐっと下げて円味を出したものである。宗旦好みの釜を多く鋳たのは、西村道仁の弟子筋にあたる西村九兵衛であった。西村道仁は、武野紹鷗の釜師として有名であり、その弟子には、利休の釜師、辻与次郎があげられる。同じ道仁の弟子であるの

に、与次郎の男性的な強さに対して、九兵衛は、女性的でふっくらした、やわらかなものを作った。丸みを帯びた柔かさ、が宗旦にあっていたのかも知れない。九兵衛作、宗旦好みに、布団丸釜がある。これは、利休の丸釜に基づき、それを低く押えることにより、外部に張りができ、平丸に近い形にしたものであるといわれる。また、土齋に宗旦が好んだという土齋釜がある。これには、二つの形が伝わっていて、一つは、大西家の「釜形図」に載っている広口で撫肩の半筒、丸味のある面取風の火包したものと、もう一つは、古浄味で作で光悦好土齋釜ともいわれる撫肩のもので太虚庵の文字があるものである。その他、宗旦好みの釜としては、口を四方形にし甌を高くした口四方尾垂釜・裏甲釜・立鼓釜・広口巴釜・霰鉈釜・累座釜・丸釜・野被釜などがあげられる。

以上のように、宗旦好み、宗旦好みといわれるものをみてきたが、宗旦好みについて、佐々木三味氏が「利休好みの圧縮であり、利休好みの枠内に於ける自己発見である」といわれているように、宗旦は、利休の好み物をうけつぎ、自分のものとし、彼なりに深め、変革していったものと思う。茶室における、室床から、土床への変化、茶道具の釜における丸みをおびさせ、低くしたこと、風炉先屏風の高さをひくくしたこと、縁をろう色塗から溜塗または杉木地にしたことなどは、利休の茶には基づいてはいたが、利休にはとられず、宗旦独自の佗びの追求にほかならなかつたと思われる。

第五節 宗旦の茶

戊申（慶長十三年）二月廿五日朝飯過

一、京都千宗旦へ不時ニ 久重彦人

床ニ大林和尚文 前ニコトウ、ウス色椿入

シャウハリ大釜 丸板ニ置

トモフタカラツ水指 利休ノ

利休ノ尻フグラ 三ツフセホドドウアリ

袋カントウ 少肩アリ 葉ハクロメ也

蓋エノミック也 モクヲラクアリ

ジュ楽黒茶ワン

瀬戸水下 引切 炭斗フクベ、

茶立ノ時、引切ヲ敷居ノ上ニ置、習ノゴトク也、其ハ一疊大ノ如

ク也 菓子フ一種 ソメ付鉢ニ、書院へ出ル。上段ニ疊敷也、是

ニ春屋ノダウガウカカル、前ニ馬上盃、香炉、卓ニ置テ 色々カ

ザル也。（松屋会記）

これは、宗旦三十一歳の時である。ここに、「茶立ノ時、引切ヲ敷居上ニ置、習ノゴトク也」とあることや、道具のとり合わせからみて、宗旦の若い頃の茶は、利休の茶に近いものであったと思われる。利休の茶を踏襲し、自分なりに茶湯をつかもうとしていたのではないかと思われる。

宗旦は、茶道は、教えられたり、教えたりするものではなく、自分で学びとるものであると考えた。寛永十年四月二十七日付宗受宛手紙に、利休の茶道具の由来を述べたのち、

志摩殿ニ何事も茶湯まわり事問候而可然候我等ハ申事きらいにて一言も不申候由可申候利休以来如此候おしへ候事なく候

といっている。これは、宗受が利休の茶道具の由来を尋ね、その返事であると思うが、私達は、話すのは嫌いであり教えなかつた、これは利休のころからであると申上げて、志摩殿（宗受有付先寺沢志

摩守)に、茶湯について何事も聞きなさいといっている。また、「茶とは何か」という問いに対して、宗且は、「本来禅によるがゆへにさらに示すべき道もなし。」と答えたといういつたえがある。宗且は、茶は禅の精神に基づいているもので、茶湯をする中で、自己を問い、自らその精神をつかみとらなくてはいけないと考えている。そして、その考え方は、利休の頃から、ずっとうけつがれているものと思われる。

自己の自身による悟り、独立性、これは、宗且の美意識につながる。宗且は、一つのものの、その自然なる独自の美を尊んだ。古田織部のように、他のものをそえたり、人工的にそのものに変化をつけることはしなかった。ただそのものの美のみを求めたのである。そして、他のものによって、成り立つ自由ではなく、個というものの重要性を説き、己を主張する自由を求めたのである。

宗且の晩年、慶安二年四月五日の松屋会記、

一、京都千宗且へ 久重啓人

隠居ノ二疊敷、但シ一疊半敷テ、残りハ板畳也、中柱有之、但シヌキハ無之候。二重筒、板畳ノサキニカケテ、上ノ重ニ、色々様々ノ花多ク入、下ノ重ニテッセン花入、筒ハ自身切候由、一重ト二重ト花入様伝授有之ホソキ釜竹ノ文有カ
テカネ蓋トツテ竹節也、織部殿ノ蓋ノゴトク、風炉小板、九目、

信楽水指 口ヒロシ 袋ニ不入小甌

ジュ楽茶ワン 今油小路ニテニセ今焼キ候由

土水下、引切 柄杓ハ、シャウサシノ写ト也風炉ノ由、灰ハホイロト半分マゼ也、

唐金火箸頭アリ、タウコノ所ヲ二枚戸ニシテ、一方ニハ茶入茶ワ

ン棚ニ置テ、ヌスエノ方、一方ニハハントウニ水アリ水薄茶モ又立ラル、手洗ニハタタズ候、タウフク脇指此等ノ事語り被申候、菓子アツキト
アミノゴドキ 餅ニサトウ
ニントウシユ、子息宗左ニ逢申候

宗且隠居後である。宗且は、利休の説くように、老いた茶らしく、水屋厩庫を使用している。また、たいへん簡素なとり合せであると思われる。

慶安三年、宗左・女室宛手紙に、

一、路次袖百余なり候、二疊敷にて茶湯出し候四疊半ニハ客時計候紹鷗のふくる棚にて、紹鷗なつめに、しゅ光茶杓にて、うりのかまつりて、ふくへの大なるにて慰候

とある。これは、宗且自身でかいた唯一の茶の様子である。この道具のとり合わせについて、「この道具組みを見ると、あつけないほどにあつさりしているのに驚きます。もう佗び茶だというような意識さえも通りこしてしまっているように思われます。紹鷗袋棚というのは、現今でいう紹鷗棚のことではなく、利休袋棚といわれている棚のことでしょう。紹鷗愛用の棗に、珠光の茶杓を取り合わせ、ふくべの花入に佗助でも生けて楽しむというのは、一見平凡のようですが、考えようによつては、自由を得た達人ではなくてはできないお茶かも知れません。」と千宗員氏が「宗且の茶」でのべている。表面的な小手先の技ではなく、文字通り宗且は、佗びに徹して自由を得たのだと思う。

宗且の茶は、飯後の茶・菓子の茶が多い。生活が貧しいためもあったが、それだけ、茶湯を気楽に、自由にしたからではないだろう。はつ鮭をもらったといつては茶湯をし、水仙をもらったといつては茶湯をする。茶湯をするに何も格式ばらず、茶湯が、生活の一

部になつていたと思われる。

また、宗旦は、「自己に徹して自由を得た人である」とよくいわれる。前述した佗びに徹したということと同じであるが、佗びに徹して自由を得たのは、宗旦だからである。封建制が確立し、身分が固定した社会において、世襲により、生まれながらにして豪奢な生活をしている大名が、故意に、佗びた真似をして、どうして本来の茶湯の意味を悟ることができようか。自分のいちばん安らぎのもめられる所、それは、環境に左右されるのである。そのために、宗旦は、自身のいる立場・環境にあった茶湯をおこない、その中で自己をみつめることができるのだと説いた。利休の「佗びた風情の中においてこそ、自己を見つめることができるのであるから、大名であるうとも佗びた茶法式を行うべきである。」という説とは、時代的背景がちがうので、異なるものである。しかし、目的（自然なるものを自己に還元して悟るといふ）は同じである。身分相応の茶をするということは、当世武士の間で流行していた大名茶の説くところである。しかし、大名茶と佗び茶のちがいは、その目的である。大名茶は、身分相応の茶をするとき、身分相応の知足を教える、身分制度にもとずき、身分意識を固定化し、身分制度にあった茶の形式化を目的とする。宗旦の佗び茶は、自分にあった茶（環境にやはり左右されるために環境にあった茶になると思われる）を行い、その中で、おのれを知り、さらには、大なる自然を知り、自由になることを目的としている。ここにおいて、必要なことは、自分に素直になることで、身分とか肩がきというものは不必要になつてくるのである。「金銀のべたる中に茶湯アリ、馬ヤの中に茶湯あり」と、宗旦はのべたという。全くそうであると思う。宗旦自らは、佗

び生活を営み、佗びた茶湯を行っているが、東福門院には、爪紅台子や、紅巾などを送っているのである。また彼は多くのいろいろな身分の人と交流したが、一番強くひかれたのは、やはり大徳寺の僧侶であったことは忘れてはならないことであると思う。

この第三章では、宗旦の人物と茶についてみてきたが、宗旦は、利休の茶と精神をうけつぎ、それを彼なりに深め、佗び茶というものを追求していったと思う。また、封建体制の強化によりなびいた石州などの大名茶に対して、被支配者側の立場にたつた、いわゆる市井の茶をつくりあげたのだと思う。

〔注4〕昭和46年5月5日に発刊された「不審庵伝来元伯宗旦文書の事」に少庵が玉室和尚にあてた云置がある。

一、少田地大徳寺領宗旦父月忌候ハ為其遣之候。此内一段の事」に少庵が玉室和尚にあてた云置がある。

とあるが、その中で宗旦父とある。「宗旦が」とか「宗旦の父の」とかよめないこともないが「宗旦の父」とよむのが妥当と思われる。少庵が美父なら、少庵が自分のことを宗旦の父などということは考えられないという説である。

〔注5〕近衛応山公ある歳、宗旦子の又隱庵へ被為成候節、只一通りの建前にて濃茶献上、相伴は格服に候処、道具御覽相濟候後、応山公被迎候趣は、我等などを茶事に招き被申候時は台天目の様に承候処、今日は只一通の濃茶手前の事、不審に候故尋ね候と御意の処、宗旦御請に成程貴人がたへ御茶献上は敬ひ候て、十人が九人台天目にて差上候へども、かよりの茅屋へ被為入候事は、全体貴人にはなき事二候へば只わびしき茶の本意に市中ながら山家へ入せられ候ての

御慰みにも准じ候事かと存じわざと一通りにて濃茶差上、則次の間には台子相かざり置候へば後の薄茶には台天目にてさし上候積りに用意候とて右の間へ御成を申し云々

〔注6〕或年宗且子を御大名方より達て御招きに付江戸表へ被參候事極り大津迄行て俄に不快とて終に出院止候由、実は虚病にて、其人へ屈し候て御館入の事、一向に不同心故と相聞申候、我等なども別て念比に候へ共此氣共に於ては甚だ以心恥敷在る事度々有之候

〔注7〕寛永十七庚辰年

三月十二日、齋了、宗且被招予、依、有少用旁々赴宗且。則、神辺宗利相客也。予持參、弱紙鼻紙武束、茶碗茗ケ肥後焼也、投宗且。雲門、菓子、出西水、点茶打談、出書院、則於書院、床於予請立花、予雖固辭不允、則予立日躰躰也、予先年望之茶杓、先日為削直、取帶而今日被返予也、自宗且直赴花坊也、内々今年被招予也。

〔注8〕四月二日与風赴宗且、則留主故、直赴武田岩淵、然則宗且亦被居、岩淵対面而、入小座敷喫茶。宗且先被帰、予可来千宗且之由也、予自赴宗且、則、口掛飯相伴而、喫晚炊、喫小団也、宗且先年借用之銀子之借状持參而返千宗且、則宗且喜悅也、河村詰茶一包、投宗且也、及黄昏帰山、今日吉権老母赴膳所也

(おわりに)

つかえるということ、何かに頼って生きるということは、自由を制限する。

利休は、すぐれた才能で、珠光以来の佗び茶というものを、ほぼ完成した。素朴でいて趣のある露地をつくったり、茶室をさらに、簡素化したり、いろいろなものに佗びた風情をもたせ、いろいろなもの創造した。しかし、秀吉に仕えていたため、その道具茶もと入れなくてはいけなかったために、「本来無一物」という佗び茶ではなく、名物に、わびたものを取り入れ、そのとり合わせに、氣をつけた佗び茶を行ったのである。

利休死後、封建体制が確立し、支配者階級である武士に、ふりかえる過去がなくなると、佗び茶というものを理解しえなくなり、武士らしさが要求されてきた。支配者に仕えていた古田織部は、その要求に応じて、利休の自然なる内面的、つつましさ、武士らしい豪放さ、明るさ、外面的なものをもった、茶にしたのである。そして、封建体制下における絶対権力者、將軍の茶道師範となったが、仕えているものの哀れさ、誤解をうけて、自刃しなくてはならなかった。織部のあとをついだ小堀遠州は、武士が貴族化した流れにのって、王朝趣味をうち出し、もてはやされたが、封建体制の、わくにあてはまるといふ精神に基づいて、規則的できっぱりとした、わくの中にあるというような好みものを、多くつくり出した。遠州のあとをついで將軍の茶道師範となった片桐石州も、封建体制のための茶湯というものを生み出し、分限の知足・分限意識ということを強く訴えた。彼は、利休の茶への回帰とか、茶は本来、禪に基づいているなどといながら、禪茶の無差別平等の意識を否定し、差別の意識を生み出しているのである。

このように、封建体制により茶がゆがめられ、その茶湯が武士の間で流行している中で宗且は、利休の茶を、正しく継承し、また、

仕官をせずには侘び茶を、自由に深めていったのである。また、彼は、石州や金盛（不昧）の茶に対して、うそをいっていると批判している。石州らの大名茶は、武士の根本的精神というもの（封建体制下における支配者の考え方）を示しているために、武士の間でひきつがれていったが、封建体制崩壊時に、ともにうすれていった。宗且の侘び茶は、子供たちにつがれていったのである。宗且の子供達は、いろいろなところに仕官したが、大名茶とちがいで、大名への仕官におもきをおかず、京にいて茶匠として生活をし、大名の他に、町人にまでも茶道を広めていったのである。そして、この流れは、今日にまで至っている。

茶道史上における宗且の位置は、利休の茶を正しく継承しただけではなく、封建体制にこびることなく、自身の茶というものを、守り、被支配者階級の立場に立って、侘び茶を深め、正しく後世に伝えたという重要なものであったと思われる。

宗且は、独立したものを好んだ。現在、茶道における我等は、古い伝統に固守しすぎてはいないだろうか。流派というものにもあまりにも頼りすぎてはいないだろうか。規則・わくにあまりにもはめられすぎていないだろうか。宗且の独立の精神、きまりきったもののへの反発の精神というものを通して、本来の茶湯というものをもう一度み直してみたい。

附記

この卒業論文を書くにあたって、めづらしい資料を見せいただいた、陽明文庫の名和先生、また、いろいろと御指導いただいた諸先生に対し深く感謝申し上げます。

参考文献

- 松屋会記
- 隔黄記
- 本阿弥行状記
- 不審庵伝来元伯宗且文书
- 陽明文庫所蔵 宗且の文书
- 茶道雑誌（昭・32・11）

元伯宗且をしのんで
宗且の茶湯

元伯宗且の一生

「一黙稿」における宗且居士とその道号について
宗且の文獻

元伯宗且逸話

宗且の茶と建築
茶道に於ける光と線

宗且の好み物

宗且伝記史料
知音（昭和46・4）

利休宗且・宗徧三人の図

知音（昭・33・6）

元伯宗且

春屋和尚の和韻に見る宗且少年
淡交増刊宗且とその時代（昭・32）

千 即 中 齋
藤 直 幹
吉 田 堯 文
堀 内 宗 完
桑 田 忠 親
久 田 宗 也
中 村 昌 生
中 村 直 勝
千 家 同 門 家
鈴 木 半 茶
澄 象 庵 阿 刀 宗 実
佐 々 木 三 味
柴 山 全 慶

一黙稿に見る宗且観
禪と佗びについて

元伯宗且伝

宗且の美学

宗且とその器物

宗且の書

宗且と楽

宗且の建築遺芳

建築学から見た宗且茶室

徳川文化の流れ

元伯宗且の茶系

織豊・寛永文化

元伯宗且文書(茶と美社) (昭・46・5)

宗且の茶

宗且とその時代

宗且の交友

宗且の人格

父

禪

筆蹟

茶室

周辺

花押注記

茶道雑誌(昭・46・9)
宗且に因む

柴山全慶
古田紹欽

井口海仙

西堀一三

佐々木三味

田山方南

磯野風船子

中村昌生

山脇 巖

奈良本辰也

浜本宗俊

芳賀・海音寺・岡本・松島

千宗員

中村直勝

久田宗也

数江教一

清内宗完

中村直勝

中村昌生

林屋晴三

清瀬ふさ子

中村直勝

宗且消息

宗且世評双註

宗且の茶約

宗且の手紙

茶道史における宗且の立場

中興名物に現われた宗且

宗且伝授聞書釈義

宗且の禪茶

宗且の一枚書

宗且と柳生宗短

宗且研究

永島福太郎

是沢恭三

高原杓庵

清瀬ふさ子

磯野風船子

十和田湖月

茶道月報 11・13・15

田中仙樵

浜木 俊

田中順二

渡込虹衣

西堀一三

昭18・3・4・5・6

7・9・10・11月

鈴木半茶

昭18・4・5・6月

堀内宗完

茶道雑誌昭38・11月昭39・1・4・8月

実相院伝来の二通の文書といわゆる十七種の什器について

杉本捷雄

中村昌生

千宗室

茶道全集第9巻

淡交社

宗且と利休四疊半

宗且の佗茶

利休とその周辺

千利休

小堀遠州

日本茶道史

図説茶道大系

1茶の美学

2茶の文化史

角川書房

利休七哲 宗且四天王

村井康彦

桑田忠親

河原書房

芳賀幸四郎

吉川弘文館

森 蘊

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃